＜紹介＞ 「アルザス語」の「綴り方」
—19 世紀末から ORTHAL 2023 まで—

作本 大祐

1. 「アルザス語」とは

今日よくみられる「アルザス語」(*dt.*[1] Elsässisch)あるいは「アルザス・ドイツ語」(*dt.* Elsässerdeutsch)の定義[2]を端的に述べるなら、「フランス北東部のアルザス地域で話されるアレマン語 (*dt.* Alemannisch)[3] およびライン・フランク語 (*dt.* Rheinfränkisch)[4] の各諸変種からなる集合」ということになる[5]。つまりこの言語区分は、既存の言語分布・方言連続体に地理的・政治的な境界線を引いたものである。これに対して、世界の言語をとりまとめる Ethnologue の分類では、この「アルザス語」のうち、アレマン語地域は「スイス・ドイツ語」(*dt.* Schweizerdeutsch)、ライン・フランク語地域は「プファルツ語」(*dt.* Pfälzisch)に含まれており[6]、「アルザス語」の項目は設けられていない。

実際はフランスという国、そして国家語としてのフランス語のもとという、スイス・ドイツ語などとは大きく異なる社会的環境におかれることとなった言語の集合体(Erhart 2020:6)だが、本稿で紹介するような当該言語とその綴字法[7]をめぐる動向によって、この「アルザス語」という独立区分が、今後より浸透していくものと考えられる。

写真: 本稿に登場するアルザス語作品 (筆者撮影)

---

[1] 主要言語の略号について、*dt.*は標準ドイツ語、*fr.*はフランス語、*els.*はアルザス語を指す。

[2] 前者の Elsässisch については、場合により「アルザスで話される言語」を指すことでアルザスの地域フランス語(l'accent alsacien)も含まれることがある(Erhart 2020:7)が、本稿では取り扱わない。

[3] このうち高地アレマン語(*dt.* Hochalemannisch)地域はスイスと隣接する Sundgau などのアルザス最南端にとどまり、中北部から南部にかけて低地アレマン語(*dt.* Niederalemannisch)地域が広がっている。

[4] Alsace bossue と呼ばれるアルザス北東部の地域などで話されるが、ストラスブール変種の長/複母音などにも影響を与えている(cf. 柴崎 2012)。

[5] これゆえにアルザス語は今日までしばしば「"ドイツ語"の方言」と紹介されることもあるが、この場合の「ドイツ語」は「ドイツの標準ドイツ語」ではなく、ドイツ内外各地の変種からなる「[広義の]ドイツ[諸]語」であることに留意しなければならない。その点でアルザス語は「広義のドイツ語を構成する一部」である; 「アルザス語」を構成する言語のうち低地アレマン語域が最も広いため、言語記述研究の中には便宜上この領域を主に「アルザス語」と定義するものがある(e.g. 柴崎 2015, 作本 2022)。

[6] < https://www.ethnologue.com/ > 2023 年 9 月 12 日時点。

[7] 本稿では、個人レベルの綴りに対して「綴字(ていじ)」、普及などが視野にある書記体系に対して「綴字法」の語を主に用いる。

2. アルザス語のさまざまな綴字と綴字法 —通時的/共時的バリエーション—

第二次世界大戦終結まで、多くのアルザス語母語話者にとっての書きことばは標準ドイツ語(*dt.* Hochdeutsch)であった[8]。この関係性においてアルザス語は話しことばであり、またドイツ語の「方言」(*dt.*Mundart)とみなされてきた。一方、公的文書ではなく文学作品の言語として、アルザス語は 19 世紀から 20 世紀前半までの期間においても、韻文・散文[9]を問わず「書かれて」いた。当時を代表するアルザス語作家、詩人としては Gustav Stoskopf (1869-1944)[10]や François-Xavier Neukirch(1874-1925), Nathan Katz (1892-1981)[11]などが挙げられる。本稿が冠する<紹介>の特性上、ここでは各人のアルザス語詩からそれぞれの綴字を実際に観察してみよう。

(1) 20 世紀初頭から第二次世界大戦前におけるアルザス語の綴字例

a. ストラスブール圏(*str.*)変種[12](Stoskopf 1905:47)

	（拙訳）
Wie ich zue de Soldate bin,	私が兵隊になって、
Do isch min Liebschti trüri g'sin,	最愛の人は悲しんだ
Sie het m'r g'saat : „„Min liewer Schang,	彼女は言った、「愛しのジャン[14]、
Siesch ohne Dich leb ich nimm lang !" – [...][13]	あなたなしではもはや生きていけないのはわかるでしょう！」

b. ストラスブール圏変種(Neukirch 1904: 13)

	（拙訳）
[...]	
S'isch méprisant, doch mach't s m'r nix	見下されようと、それがどうした
Un thuet mich nit verdriesse ;	愉快に不がつくこともない。
So kann i doch in voller Ruej	そして私は静けさのなかで
Min Klewerplatz[15] geniesse ![...][16]	広場をひとり享受する。

---

[8] しかしこの標準ドイツ語も、「正書法」(*dt.* Rechtschreibung)と呼ばれるものが確立したのは 19 世紀後半になってからのことである(cf. 高田 & 新田 2013:32)。

[9] 演劇脚本および(短編)小説。

[10] ストラスブール近郊 Brumath 出身で、詩作もストラスブール変種に近い。画家としても有名だった。

[11] アルザス南端 Sundgau の Waldighofen 出身で、詩作にはスイス・ドイツ語と同じ高地アレマン語の特徴が顕著に現れている。

[12] 本稿では「アルザス語」という *fr.* polynomique な集合体を構成するそれぞれの *dt.* regionale Variante について、「(地域)変種」の語を用いている。また日本語で示した変種名おける「圏」は、既知の言語資料から特定の街や村を中心とするエリアを概ね同定できるものの、詳細までは不明な変種(Stoskopf (1905)の場合でも、その細部では Brumath 変種ではなくストラスブール変種で書いている可能性は否めない)に対して本稿筆者が付与しているものである。

[13] 詩 *Von d'r Trej* (*dt.* Von der Drei)から抜粋。

[14] Schang はフランス語名の Jean にあたる。

[15] クレベール広場(*dt.* Kléberplatz ; *fr.* Place Kléber)はストラスブールの中心に位置し、同地出身の軍人クレベール(Jean-Baptiste Kléber)の銅像がある。

[16] 詩 *D'r Klewerplatzbrueder* (*dt.* Der Kleberplatzbruder)から抜粋。

c. スンゴー(Sundgau, *sdg.*)圏変種 (Katz 1930/1987: 18)

[...]	（拙訳）
Do hani àndlig si gfunge,	そこでついに彼女を見つけた、
Noh aller Verzwiflig,	あらゆる絶望の末に、
Noh Johre vo Süeche	何年も探し、
Un Johre vo Schmàrz :	何年も苦しんだ末に。
Alli verstosseni Scheenheit un Liebi,	居場所を追われた美しさと愛のすべて、
Versteckt un bschirmt	それは隠され、守られていた、
In dim eifache Hàrz. – [17]	あなたの澄んだ心のなかで。

明らかなのは 20 世紀初頭の当時、書きことばとして位置づけられていた標準ドイツ語の綴字法が、これらのアルザス語テクスト全体に反映されていることである。まず(1)におけるいずれの綴字でも、[y]/[ʏ]に対して u-ウムラウト<ü>、[f]に<f>および<v>、[v]に<w>、そして[ʃ(d̥)]に対して<sch>あるいは(形態素左端で)<s(t)>が用いられており、文中でも名詞が大文字で始まっている[18]。ところが、アレマン語において音素対立が失われているところでも、書記上で標準ドイツ語と同様の書き分けがおこなわれている。アルザス語では、標準ドイツ語における/p,t/と/b,d/という硬音・軟音の対立が大部分で消失しており(i.e. /b̥,d̥/)[19]、たとえば *dt.* tun の直説法現在 3 人称単数形にあたる *els.* **th**uet ((1)b.)の頭子音は[d̥]であるが、これは(1)における *els.* Sol**d**ate (*dt.*Soldaten), **d**o (*dt.* da), Liebsch**t**i(*dt.* Liebste), **t**rüri (*dt.*traurig), he**t** (*dt.* hat), ver**d**riesse (*dt.* verdrießen), àn**d**lig (*dt.* endlich), vers**t**osseni (*dt.* verstossene)などといった<t,d>と同じ音である[20]。なおこの<th>はまさに、当時の標準ドイツ語において外来語と「在来語 7 語」(Tal, Ton, Tor, Tran, Träne, **tun**, Tür)[21]、およびその派生語にのみ使われていた書記素[22]である[23]。

綴字における以上のような標準ドイツ語の影響は、第一次世界大戦が終結し、アルザスがフランス統治下に入ってから半世紀近く経過してもなお残り続けている(cf. (2))。

---

[17] 詩 *D' verstosseni Liebi*(*dt.* Die verstoßene Liebe)から抜粋。

[18] 以下では音素・音韻形式を/ /、音声形式を[ ],書記素を< >で囲んで表す。

[19] 有気性をともなう硬音[pʰ,tʰ]は、①(一部の語彙で)ドイツ語における/p,t/のうち、これらが語基の先頭にあり、かつ直後に母音が続く場合(e.g. *els.* [tʰeː], *dt.* Tee)、あるいは ②/b̥,d̥/のうち、/h/が後続する場合(e.g. *els.* [pʰɒld̥ə], *dt.* behalten)において現れる。逆に *dt.*tot は *els.*[d̥oːd̥], *dt.* Platz は *els.*[b̥lɒt͡s]となり、理論上はそれぞれ *els.* dod, Blàtz などと綴ることが可能である。

[20] つまり *els.* Liebschti, trüri などもまた、理論上は Liebsch**d**i, **d**rüri と綴ることができ、その音自体は変化しない。

[21] Duden(1908:ix)

[22] ibid.; ただし、Duden(1908)の時点では<th>がもはや外来語にしか用いられないことが明記されている(e.g. *dt.* thun > tun; *dt.* Theater)。

[23] 今日のアルザス語に至るまで存在する書記素<t>と<d>というバリエーションついては、アルザス語の助動詞 düen/tüen に関する柴崎(2015)などでも触れられている。

一方、(1)c.の Katz の綴字では、フランス語でも使用されているアクサングラーブ(ここでは<à>)が現れている。アルザス語では標準ドイツ語の/a/に、後舌化した/ɒ/[24]が対応する(e.g. *dt.* Mann /m**a**n/ vs. *els.* /m**ɒ**n/)ことが多く[25]、逆に標準ドイツ語の/ɛ/へは多くの変種で/a/が対応する(e.g. *dt.* Herz /h**ɛ**r͡ts/ vs. *els.* /h**a**r͡ts/)。これを踏まえると、Stoskopf(1905)も Katz(1930/1987)も<a>で表している音は[a]ではなく後舌の[ɒ]であり、さらに後者では<à>を以て[a]を表している。

アクサングラーブを用いた[a]と[ɒ]の表し分けは、特に戦後における他のアルザス語作家や、本稿で後述する ORTHAL でも採用されているが、この<à>が 2 つの母音のうちどちらを指すのかは、現在に至るまで書き手や綴字法提唱者によってまちまちであり、ORTHAL の<à>の場合、Katz とは違い後舌母音[ɒ]を表している。

そして、変種間の差異も綴字に現れる。たとえばストラスブール変種やほかの低地アレマン語系の変種では、母音や/r/,/l/に左右を囲まれた/b/は摩擦音化して[v]として実現されるため、*dt.* Kléberplatz や形容詞変化した *dt.* lieber(3 人称単数男性主格)が *str.* Klewerplatz ((1)b.)や *str.* liewer ((1)a.)のように書き表されているが、高地アレマン語であるスンゴー圏変種ではこの摩擦音化が生じず[26]、*dt.* Liebe は**sdg.* Liewi ではなく *sdg.* Liebi となっている。

いずれにせよ、アルザス語はこの時点でも少なからず「書かれていた」ものの、それはあくまで各個人が標準ドイツ語の正書法(また場合によってはこれに加えてフランス語の正書法)をもとに音写した「綴字」という側面が大きく、独自の統一的な「正書法」が確立していたわけではない。

ナチ・ドイツによる占領統治を経たアルザスが再びフランスに編入されると、アルザス語を取り巻く状況は大きく変化していく。「ナチの言語」であるドイツ語は即座に学校での使用を禁じられたが、ドイツ語と同一視された「アルザス方言」も、もれなくその巻き添えを食うこととなった。とはいえ 1954 年の調査時点では、フランス語話者はアルザス地域全人口の約 5%にすぎなかった一方で、アルザス語話者は 95%以上という圧倒的な割合を誇っており[27]、60 年代まで「ほとんどの家庭ではアルザス語を話し」、「アルザスに移住した外国人であっても[...]アルザス語が話せなければ就職はできず日常生活も都合が悪かった」という(市村 2002: 430)。しかし、教育現場から社会、家庭内[28]にいたるまでフランス語が浸透するにつれ、若い世代へのアルザス語の継承は激減し、家庭内でも言語コミュニケーションに支障が生じるなど、「アルザス人」としてのアイデンティティの危機が叫ばれるようになった(cf. 市村 2002; フィリップス 2010; Riehl & Beyer 2021)。

---

[24] これは俗に「暗い a」(dunkles a)とも呼ばれ(Weckmann 1989: 6)、文献によっては[ɔ](Matzen&Daul 2010; Erhart 2020)で表される。

[25] 厳密には中世高地ドイツ語(*mhd.*)の短母音/a/に対応する。*Mhd.* slâfen (*dt.* schlafen)のような長母音は、アルザス語では/oː/に変化している(i.e. *els.* /ʃloːfə/)変種が多い。

[26] cf. König (2019: 138)

[27] アルザス語話者は Haut-Rhin 県で 43 万 6000 人(45 万 9000 人中)、Bas-Rhin 県で 63 万人(66 万 2000 人中)。 これはフランス語/ドイツ語併用者も含む数である(市村 2002: 430); フランス語話者は Haut-Rhin 県で 2 万 2500 人、Bas-Rhin 県で 3 万 2432 人(ibid.)。

[28] 「保護者はこどもが自分たちのつましい生活よりも豊かな生活を送るよう望んだ。とすればフランス語を習得し、学校で優秀な成績をとることが望ましいことになる。」(ibid.: 431)

そのような 20 世紀後半のうち、ここでは 80 年代から 90 年代におけるアルザス語の綴字をみてみよう。以下は戦後のアルザスを代表する作家 André Weckmann(1924-2012)によるサヴェルヌ(Saverne)変種のテクスト((2)a.)、ストラスブール変種をベースにしたアルザス語の文法書における文例((2)b.)、そして『星の王子さま』(*Le Petit Prince*)のコルマール圏変種訳テクスト((2)c.)である。これらはアルザス地域住民の 80~90%がフランス語を話すようになった一方で、家庭語としてのアルザス語使用は全家庭の 60~70%程度に下落するなど、アルザス語とフランス語の立場が逆転した時期(市村 2002:431)の出版物である。

(2) 80 年代から 90 年代におけるアルザス語の綴字例

a. サヴェルヌ(*svr.*)変種 (Weckmann 1989: 47)

	(拙訳)
Ech waeiss noch d schankel	まだ太腿を覚えている
wie wàrmi schlànge	それは温かい蛇のよう
ech waeiss noch d brescht	まだ乳房を覚えている
wie waeichi monde	それは柔らかい月のよう
ech waeiss noch d liëb wie jüniraje	6 月の雨のような愛もまだ
un e küz ufem dàch	それから屋根にとまったフクロウは
granzt d ewichkaeit àb.[29]	悠久の時を二分する。

b. ストラスブール変種(Jenny & Richert 1984)

i. Wò min Schweschterle uf d'Welt ísch kòmme, bín ich fénf Jòhr àlt gsín. (ibid. 77)

「妹が生まれたとき、私は 5 歳だった。」

ii. Er kànn schéen sínge. (ibid. 33)

「彼は上手に歌うことができる。」

iii. Wärde m'r nùmme nítt ín des Dërfel gfàhre ! (ibid. 74)

「我々がこの小さな村に行きさえしなければ！」

iv. Uf'm Kléwerplàtz hett er schnell noch e Zittung kaaft.(ibid. 82)

「クレベール広場で彼は即座に新聞をもう一部買った。」

[29] Weckmann(1989)は<ae>で[æ](*zwischen e und a*)、<ië>で[iə](*mit abgeschwächtem e*)を表している。

c. コルマール(*col.*)圏変種(Zipfel 1995:30)

Ich hà ne in d'Arm g'numme. Ich hà n'm gsajt : « Die Blüem, wo dü garn hesch steht net in G'fohr ... E Mülkorb düew idim Schof zeichne... Dini Blüem bekummt e Reschtung... Ich... » Ich hà nimm g'wesst wàs sàje. Ung'schickt hàw i mi g'fühlt. Ich hà nimm g'wesst wie n'm zu versteh ga, wie si Harz z'erreiche... 'S isch eso mysteriös 's Lànd vo d'r Traane.

(拙訳) ぼくは彼を抱きしめた。ぼくは彼に言った、「きみの好きな花は大丈夫だよ...ぼくがきみの羊に口輪を描くから...きみの花を囲うよ...それから...」ぼくはもう何と言えばいいかわからなかった。自分が口下手であるように感じた。彼の心にどう触れればいいのか、それを彼自身にどう訊けばいいのかも、ぼくにはもはやわからなかった。涙の国、その国はこれほどにも謎めいている。

(2)におけるいずれのテクストでもアクサングラーブ付きの<à>が採用されているが、これらはすべて後舌の[ɒ]を表しており[30]、<à>を[a]に対して用いている Katz とは正反対である。これらの綴字における<à>は、個別言語レベルにおける母音の有標性(i.e. Katz etc.)のマーカーではもはやなく、素性の観点からもシンプルで、かつ多くのヨーロッパ言語で一般に<a>をもって表される母音[a]に対する、後舌母音[ɒ]の有標性を示すマーカーとしての側面が強いといえる。

このほかに、(1)b.の Neukirch(1904)では<**th**>で頭子音が表されていた *els.* **th**uet (*dt.* **t**ut)が、(2)c.の Zipfel(1995)では *col.* **d**üew i[...](*dt.* tue ich)となっており、直後にある *col.* **d**im (*dt.* deinem)の頭子音と同じ音であることがわかる。その一方で、同じ *col.* düe**w** i の<w>は[v]を表しているなど、標準ドイツ語的な書記素も健在である。

このような「標準ドイツ語的な綴字か、それともより表音的な綴字か」という観点でまた興味深いコントラストをみせるのは、(2)a.-c.における[ɪ]の綴字である(表 1)。たとえば(2)b.として示した Jenny & Richert (1984)では、[ɪ] (狭めの[e])のうち、標準ドイツ語で<i>と綴られるものを<í>、そうでないものを<é>で表していることが明言されており(ibid.:12; e.g. *str.* f**é**nf, *dt.* f**ü**nf; *str.* Fr**é**nd, *dt.* Fr**eu**nd)[31]、似たような傾向は(2)c.の Zipfel(1995)においても *col.* net (*dt.*nicht)のケースなどを除きみとめられる。一方(2)a.の Weckmann(1989)では標準ドイツ語的な綴字をあまり重視しておらず、たとえ 1 人称単数の代名詞 *dt.* ich であったとしても[ɪ]に対して<e>を割り当てており、文中の語は名詞も含め小文字で始まっている。

[30] ただし(2)c.の Zipfel(1995)では、大文字についてアクサングラーブがついている場合と省略されている場合が混在している(e.g. *col.* Àntwort, Antwort, *dt.* Antwort)。

[31] しかし、*str.* [ɪ]ch(*dt.* ich)には総じてアクサンテギュのない<i>が用いられている(むろん強調などを目的として緊張母音化している可能性も否定できない)。また *str.* g's**í**n(*dt.* gewes**e**n)もこの使い分けの限りでないように思われる(Zipfel 1995 ではおそらく長母音ではあるが *col.* gs**e**)。

表１： (2)a.-c.における[e]の綴字

[e]	*dt.***i**ch	**i**st	(括弧内は(2)の引用部以外から)
Weckmann(1989) *svr.*	**e**ch	**e**sch	(n**e**t, m**e**t, k**e**nd)[32]
Jenny & Richert (1984) *str.*	**i**ch	**í**sch	f**é**nf, n**í**tt, b**í**n, s**í**nge, gs**í**n, (m**í**t, K**í**nd)[33]
Zipfel(1995) *col.*	**i**ch	**i**sch	(f**e**nf), n**e**t, b**i**n, (s**i**ngt), g'w**e**sst, (m**i**t, K**i**nd)[34]

19 世紀末のアルザス語辞典(Martin & Lienhart 1899-1907)から 21 世紀の ORTHAL 2016 までのアルザス語の綴字や綴字法を、「アプローチ(approche)」[35]と「規範(norme)」[36]という評価基準から比較した Beiner(2022b)は、このような Weckmann の綴字について、あくまでも読者に実際の発音を正確に伝えるためのものであり、そのために標準ドイツ語の綴字から乖離することも厭わない点が特徴であると分析している(ibid.:65)[37]。これを踏まえると、アルザス語で詩作し、それを書いているという点では 20 世紀初頭の Stoskopf や Neukirch と同じである一方、標準ドイツ語の正書法に可能な限り忠実であった彼らの綴字とはまた性質が異なるといえる。

3. ORTHAL　―ドイツ語との繋がり―

前述のように、戦後のアルザス語はナチ・ドイツが遺した負の印象を、標準ドイツ語とともに背負うこととなり、能動的にアルザス語を使用する人口は減少の一途をたどっていた。そのような状況下においてアルザス語話者の間でみられた選択は、アルザス人が話すゲルマン系の地域語を「アルザス語(*els.*Elsassisch)」として「ドイツ語」から分離させるというものであった(Riehl & Beyer 2021:13)。この分離の動きが広がっていった 1970 年代(ibid.)という時代背景のなか、「アルザス語のための綴字法」もまた提唱されるようになる(Beiner 2022b: 71)[38]。

21 世紀に入り、アルザス人の言語レパートリーが混沌としつつある(Erhart 2020:11[39]; cf. 市村 2002: 455)なかでも、このような綴字法の提唱は複数現れているが、興味深いことに、これらのうちほとんどで標準ドイツ語の正書法との互換性を保ち続けている。確かに「アルザス語」という概念は、ドイツ語と政治的に分離することを選択した結果であるが、その理解と習得に際しては

[32] *dt.* nicht, mit, Kind
[33] *dt.* fünf, nicht, bin, singen, gewesen, mit, Kind
[34] *dt.* fünf, nicht, bin, singt, gewusst, mit, Kind
[35] 下位区分に「形態音素的(morphophonémique)」、「音素的(phonémique)」、「フランス語的側面(aspect du français)」「標準ドイツ語との近似(proche allemand)」、「体系性(systématicité)」。
[36] 下位区分に「統一的多様性(polynomique)」(話者間等の変異を擁しながら一定の統一性をもった集合体とみなされているかどうか)、「厳格性(rigide)」、「自然発生的(spontanée)」。
[37] Beiner(2022b)自体は Weckmann(1975)を用いて綴字の分析をおこなっている; ただし上述のように Weckmann の綴字もまた標準ドイツ語がベースであり、アルザス語を書こうとするのであれば標準ドイツ語とその正書法を学ぶ必要があると述べていたようである(ibid.)。
[38] 70 年代の綴字法の提唱としては Urban, M. (1975): *Écrivez l'alsacien* および Groupment colmarien pour la promotion d'une écriture harmonisée des divers parler alsaciens (1978): *Versuch einer harmonischen Schriftung der Mundarten des oberrheinischen Raums.*がある(ibid.)。
[39] SNS 上に書かれた *els.* „**f**ertom**y**" (*dt.* verdammt; ORTHAL では *els.* **v**erdàmm**i**.)および *els.* „mein li**v**er m**o**hn" (*dt.* mein lieber Mann; ORTHAL では *els.* min li**e**wer M**à**nn)を例に挙げ、今日話者がアルザス語を書く際に参照している言語(の綴字法)が、フランス語やドイツ語に限らない(e.g. 英語)ことを指摘している。

ドイツ語の知識や綴字上の互換性が少なからず助力する側面もあるという、複雑な事情を抱えているのである。

まず、その綴字法のひとつである GRIMAL(n.d.)は、その中に「ドイツ語の知識がある人やドイツ語話者向け[40](*V1*)」、「フランス語話者・初学者向け[41](*V2*)」という 2 種類の書記システムが用意されている。ただし、これら 2 つの違いは、*V1* が標準ドイツ語で<i>と綴られる[ɪ]に<î>、そうでない[ɪ]に<é>を用いる(e.g. *els.*K**î**nd, *dt.* K**i**nd; *els.* Gl**é**ck, *dt.* Gl**ü**ck)[42]のに対し、*V2* では無条件に<é>を用いる(e.g. *els.* K**é**nd; *els.* Gl**é**ck)[43]という点にすぎない。「ドイツ語の綴りにできるだけ近づけることを意図している[44]」と明記されているように、GRIMAL の *V1* と *V2* いずれにおいても、[v]は<w>、[ʃ]は<sch>で表すことになっている。

この GRIMAL のほかに、今日まで改訂が続く ORTHAL(**Orth**ographe **al**sacienne; Zeidler & Crévenat-Werner 2008, n.d.[45]; A.G.A.T.e 2016, 2023)[46]がある。ORTHAL は、首尾一貫した綴字法[47]でアルザスにおけるあらゆる変種の発音を尊重するアプローチをとり、ドイツ語運用能力にかかわらず誰もが負荷なくアルザス語と識別し、かつ利用できるものであることを指針のひとつとしている。しかし同時に、名詞を大文字で書き始めるというルールをはじめとした標準ドイツ語の正書法を参照することもやはり明記している。この ORTHAL は、アルザスで提唱された綴字法のなかで最も有名なものであり、近年改訂されたアルザス語教材[48]やアルザス・モーゼル言語文化局(Office pour la Langue et les Cultures d'Alsace et de Moselle, OLCA[49])における刊行物などで採用されている(Beiner 2022b:115)。そして 2023 年版の冒頭で述べられているように、ORTHAL は Beiner(2022b)が Pascale Erhart 氏によって Edgar Zeidler 氏宛てに送付されたことが契機のひとつとなって今年改訂された(A.G.A.T.e 2023:4)。

---

[40] "*pour ceux qui ont quelques notions d'allemand ou qui sont germanophones"* [最終閲覧日: 2023 年 9 月 8 日]

[41] "*pour un public exclusivement francophone. Cette légère variante est plus intuitive pour le néophyte"* [最終閲覧日: 2023 年 9 月 8 日]

[42] (2)b.で挙げた Jenny & Richert (1984)と同様である。

[43] Weckmann(1989)の綴字((2)a.)に近い。

[44] "*La graphie proposée tend à se rapprocher le plus possible de la graphie de l'allemand*"[最終閲覧日: 2023 年 9 月 13 日]

[45] 著者のひとりである Edgar Zeidler 氏曰く 2013 年刊行とのこと(2023 年 11 月 15 日)。つまり ORTHAL 2016 公表前である。

[46] 左から Zeidler & Crévenat-Werner (2008), A.G.A.T.e (2016), Zeidler & Crévenat-Werner (n.d.), A.G.A.T.e (2023); ORTHAL の前身には 2003 年に登場した GRAPHAL/GERIPA があり、のちに ORTHAL を提唱する Edgar Zeidler の作品 *Andzitt Endzeit Fin d'une époque* (2007)でも、アルザス語の綴字には GRAPHAL/GERIPA が採用されている; 『発話言語学研究』本号で宮腰駿氏・杉浦黎氏が共訳しているバージョン(i.e. Zeidler & Crévenat-Werner n.d.)は、OLCA 向けに作成された ORTHAL(i.e. Zeidler & Crévenat-Werner n.d.)である(c.f. Beiner 2022b: 106-107); 当該綴字法の名前にもある *fr*: orthographe という語自体は、「真」を意味する接頭辞 ortho-があることからも「正書法」と訳すことができる。しかし、以下で後述する ORTHAL(とりわけ 2023 年版)の性質とそれを取り巻く現状をみると、この Orthographe alsacienne を「アルザス語の正書法」と訳すことは適切でないことがわかる。

[47] そのような書記体系の必要性は、主に将来の世代へ混乱なくアルザス語を伝えることにあるとしている(Zeidler & Crévenat-Werner 2008: 11)。ただし、ORTHAL がアルザス語の「標準化」を支持するものではないことも明言されている(A.G.A.T.e 2023:4)。

[48] Troxler, Sylvie (2021) *J'apprends l'alsacien avec Tommy et Louise,* Editions MK67.

[49] < https://www.olcalsace.org/fr >[最終閲覧日: 2023 年 9 月 12 日]

この Beiner(2022b)は、それ以前の ORTHAL 2008 および ORTHAL 2016 に対して、音声学・音韻論的整合性を重視する立場[50]からいくつかの指摘をおこなっている。たとえば[d̥]の書記素について、ORTHAL では同音異義語における混乱(たとえば *dt.* re**tt**en と *dt.*re**d**en はアルザス語ではどちらも/ʁɛd̥ə/である)を避けるために、標準ドイツ語の綴字を参照することで<t>と<d>に書き分けることを推奨している(i.e. *els.* re**tt**e, re**dd**e; A.G.A.T.e 2023:35)が、これについて、読み手に「*els.* re**tt**e と *els.* re**dd**e は異なる発音である」といった誤解を与える可能性があることを指摘し、逆に[g̥ʃ]に対して<chsch>を用いること(e.g. *els.* naa**chsch**tens, *dt.* nächstens)については、*els.* mà**chsch** [mɒχʃ] (*dt.* machst)の<chsch>などと表している音が異なることから、綴字上混同されるおそれがあるとした。(Beiner 2022b:109)。

以下の表 2 は、とりわけ Beiner(2022b)が指摘した書記素のうち一部について、ORTHAL の各バージョンを比較したものである。前述のとおり、ORTHAL 2023 でも「多彩なアルザスの言語変種を網羅した書記体系」と「標準ドイツ語依拠」の両立というバランス路線が引き続き堅持されている一方で、ORTHAL 2016 以前に比べるとより表音的な書記素のオプションも大幅に増加している。とりわけ<b>,<d>の使用については、同音異義語が存在するか否かにかかわらず、アルザス語の発音を優先する場合には同様に使用されうることが明記され、[g̥ʃ]に対しては<chsch>のほかに新たな選択肢として<gsch>が提示された。それから/f/に対する<f, v>についても、書き手が迷った場合において標準ドイツ語の参照が推奨される方針へと変化している[51]。

一方でこの改定後も不明瞭な点はいくつか残り続けている。たとえば /g̥s/ に対する 4 つの書記素 <gs, ks, x, chs> について、ORTHAL 2008 や ORTHAL 2016 のような書き分けの指示は削除されたものの、これらが自由異綴字(*dt.* freie Allographe)として扱われるようになったのかは明記されていない。このため ORTHAL 2008 では「避けられるべき」だとされていた *els.* wà**x**e や wà**ks**e, wà**gs**e(いずれも/vɒ**g̥s**ə/; *dt.* wa**chs**en)といった綴字が、ORTHAL 2023 においてオプションとして想定されているかは定かでない。またほかにも、ORTHAL が 1 つの書記体系にアルザス各地のさまざまな母音体系を取り込んだ結果、実際の変種と音素(の対立)においてずれが生じている可能性が指摘されうる。その具体例として<ee>を[eː]に対して用いるとする項目を参照すると、そこでは *els.* S**ee**l [s**eː**l] (*dt.* Seele), *els.* scheen [ʃ**eː**n] (*dt.* schön), *els.* Meer [m**eː**r]などの語が挙げられている(A.G.A.T.e 2023:16)。確かに、ライン・フランク語域やストラスブール変種、そしてコルマールより南の地域において、これら 3 語の母音はほぼ同じ[eː]である(Beyer & Matzen 1969: map 51)。と

[50] 同時にアルザス語は必ずしも標準ドイツ語と接続する必要はないとし(接続自体は否定していない)、アルザス語をアルザス語だけで学べることを志向している(ただし、これは言語の標準化を目指すことは意味しない)。これはフィリップス(2010)などが従来唱えてきた、「アルザス語の習得と標準ドイツ語の知識は切り離せない」という姿勢とまた異なるものである; Beiner 氏はアルザス語教育について、1 教員が各生徒の学びたい変種(e.g. 生徒 A はストラスブール圏変種, 生徒 B はミュルーズ変種 etc.)をそれぞれ教え、他の生徒も個人的な学習目標ではない変種を同時に耳にすることで、さまざまな変種に対する理解力を醸成し、かつ寛容になれるようなシステムが理想であるとしている。ただ、教員の確保に際しては大きな壁が立ちはだかる問題も承知している(Beiner Nathanaël 氏と本稿筆者の個人的な会話より, 2023 年 9 月 15 日)。

[51] なお<w>が依然として[v]を表し続けているのは、*els.* vann [van] (*dt.* wenn)という綴字の場合、ドイツ語話者側が*[**f**an]と誤読しかねないことが理由として挙げられうる。逆に *dt.* **v**erstehen などは *els.* **f**e(r)stehn という綴字でも、そのような誤読のおそれがない。

ころが、北ヴォージュ(Niederbronn-les-Bains 以南)からコルマールまでの低地アレマン語地域におけるほとんどの変種では、中世高地ドイツ語(*mhd.*)における<ê>と<œ>が/ɪː/に変化している。そのため、*dt.* schön (*mhd.* schœn), *dt.* Seele (*mhd.* sêle)はそれぞれ[ʃɪːn], [sɪːl]と発音され(/ɪː/)、*dt.* Meer (*mhd.* m**e**r)に対応する *els.*Meer [m**eː**r](/eː/)と音素が異なっている(ibid.; cf. Martin & Lienhart 1899-1907)。これは、以上の諸変種が ORTHAL 2023 に倣えば、*dt.* gehen (*mhd.* gê**n**)でも *els.* g**ìh**n あるいは g**ì(ì)**n (i.e. [g̊ɪːn]; vs. *str.* [g̊**e**ːn]; Beyer & Matzen 1969: map 197, Urban 1975: 33)と綴ることを意味する(cf. A.G.A.T.e 2023: 62)が、この綴字法の使用者として他方で想定されるドイツ語(も話す)話者が *els.* g**eh**n(ただし[g̊ɪːn])という綴字を望む場合、/eː/への異なる書記素の割り当ては少々厄介になるという問題がある[52]。

表２： ORTHAL の変遷（一部抜粋）

	ORTHAL 2008	ORTHAL 2016	ORTHAL 2023
/b̥/に対する<p, b>; /d̥/に対する<t, d>	アルザス語の発音を重視する場合は<b, d>になるが、同音異義語で混同されるおそれがある場合は**ドイツ語の綴字に倣うことを推奨する**(ibid.:37)。	**ドイツ語に倣った綴字にするべき**だが、同音異義語と混同する恐れがない場合はどちらを使ってもよい(ibid.:18-19)。	同音異義語が混同されるおそれがあっても**アルザス語の発音を重視する場合は、ドイツ語の<p>や<t>に対して<b>や<d>を用いてもよい**。(ibid.:75)
/f/に対する<f, v>	**語のリファレンス**(ドイツ語; ロマンス系言語からの借用 etc.)**に応じて<v>と<f>を使い分ける**(ibid.:43-45)。	<f, v>は**対応するドイツ語の綴字に倣って使い分ける**(ibid.:22)。	<f, v>の**使い分けが分からない場合は、対応するドイツ語の綴字を参照する** (ibid.:34, 80)。
/g̊s/に対する <x, ks, chs, gs>	<x, chs>(<ks>は稀); Dàx, Dàks (*dt.*Dachs); wàckse, wàxe (*dt.*wachsen); ksund, xund (*dt.*gesund)	**ドイツ語の綴字を参照する**ことで「不幸な混乱[54]」を避けることができる(ibid.21); <x, chs, ks, gs>	[用例のみ]; <gs, ks , x, chs> (ibid.78)

[52] これは ORTHAL 2023 が世に送り出された後に、Beiner 氏が自ら用いる変種の適用に際して疑問を抱えているところでもある (Beiner Nathanaël 氏と本稿筆者の個人的な会話より, 2023 年 9 月 15 日); 後述の表 3 にもあるように、<i>と<e>という書記素自体は/e/においてオプションの関係になるとされている; しかし、ここで本稿の参照している言語資料および言語地図が主に 20 世紀初頭から 1970 年代までのものであることには留意する必要がある。

[54] Beiner(2022b: 109)は、*dt.* Se**x** と *dt.* se**chs** (いずれも *els.*/sɛg̊s/)が念頭に置かれているとしたうえで、この場合大文字/小文字スタートという品詞分類的なルールがすでに適用されていることから、書記素を異なるものにする必要があるか懐疑的な姿勢をとっている。

	などは、「**豊かで古い文化と結びついた、長い歴史を持つ言語の綴字法というよりは音声表記や SMS 言語に近い**[53]」**形式**であるため、**避けるべき**である(ibid.:50)。		
/g̊ʃ/に対する<chsch, gsch>	[記載なし]	**ドイツ語の綴字に近づける**ために<chsch>を使用する(ibid.:21)。	<chsch, gsch>から**選択できる**(ibid.:78)。
(口蓋化以外の)半母音[j](音節核の副構成素)に対する<j>の使用について	「**ドイツ語とはかけ離れた表記になり、読みやすさに問題が生じる**」(ibid.:47)[55]。	[記載なし]	「nèii (*dt.*neue)のような**不格好な綴字を避けるためにも使用する** (i.e. *els.* nèji) 」(ibid.74)[56]。

とはいえ、ORTHAL 2023 からは従来の書記素一覧と別に、接語における分かち書きの有無なども含んだ綴字の自由選択に関する表も新たに追加された(表 3)[57]。これは ORTHAL に対する Beiner(2022b)の成果がもっとも可視化されたところであり、これによってこの綴字法の使用者にどのような選択肢がデフォルトで用意されているかを、おおむね一目で確認できるようになった。

今後も ORTHAL は、今回の 2023 年版における音素対立をはじめとした内容の吟味を経て、あるいは刻一刻と変化するアルザスの言語状況を踏まえ、引き続き改訂が続けられていくものと予想される。

---

[53] *"Elles s'apparentent davantage à l'écriture phonétique ou au langage SMS qu'à l'orthographe d'une langue qui a une longue histoire, reliée à une culture riche et trés ancienne."*; 一方このような<x>の用法は、「20 世紀最大のアルザス語詩人として紹介されることも多い André Weckmann による文章の特徴」(Beiner 2022b:110)である(e.g. *els. Ixidigar, dt.* ich sehe dich gern; cf. Erhart 2020:9)

[55] さらにその「残念な綴字(graphies malheureuses)」として *els.* nej (*dt.* neu), Nejjohr (*dt.* Neujahr), ejch (*dt.* euch)が挙げられている。

[56] 綴字の「不格好」さや「読みやすさ(*fr.* lisibilité)」など、基準についてあまり明瞭でない記述が依然として散見される。

[57] ただし、書記素の自由選択がみとめられている音素のすべてが掲載されているわけではない(e.g. /f/に対する<f>と<v>)。

表３:ORTHAL 2023 の「自由選択できる綴字一覧[58]」(A.G.A.T.e 2023:82-87)

	選択肢 A	選択肢 B
母音の後の/s/	<s>: e.g. gro**s** (*dt.* groß)	<ß>: e.g. gro**ß**
/b̥/	<p, b>: e.g. à**p**àsse (*dt.*an**p**assen) [ドイツ語に基づき使い分け]	(音素対立がなければ)すべて<b>: e.g. à**b**àsse
/d̥/	<t, d>: e.g. re**tt**e (*dt.* re**tt**en); re**dd**e (*dt.* re**d**en) [ドイツ語に基づき使い分け]	(音素対立がなければ)すべて<d>: e.g. re**dd**e (*dt.* reden/retten)
/e/	<ì>: e.g. f**ì**r (*dt.* für)	<e>: e.g. f**e**r
/e/ (縮約削除)	音素明記: e.g. d**er** (*dt.* der)	省略(<'>): e.g. d**'**r
広めの/eː/ ([ɛː])	<è, èè, èh>(=*dt.* <e>): e.g. r**è**da (*dt.* r**e**den); L**è**hra (*dt.* L**e**hrer); <ä, ää, äh>(それ以外): e.g. T**ä**ter; W**ä**hler [ドイツ語に基づき使い分け]	すべて<ä, ää, äh>: e.g. r**ä**da; L**ä**hra; T**ä**ter; W**ä**hler
(接語/拘束形態素)	ひとかたまりにする: e.g. ì**me** Bett (*dt.*in einem Bett)	分かち書き: e.g. ì **me** Bett/ ì**m e** Bett[59]
南アルザスの縮小辞	e.g. Maid**lì** (*dt.*Mäd**chen**)	e.g. Maid**lé**
<'>	省略記号としてのみ使用: e.g. **'s** rajt (< **es** rajt; *dt.* es regnet) (vs. **s** Elsàss, *dt,* das Elsass)	自由に使用: e.g. **'s** rajt; **'s** Elsàss
(一部の長母音表記)	狭めの/eː/([eː])と表記上長短が曖昧な母音について 1 字増やす(exc. *dt.* hoch, Sprache, Ostern): e.g. h**o**ch; Spr**o**ch; **O**schtre; D**à** (*dt.* Tag)[曖昧ではない]; B**ü**r (*dt.* Bauer)[曖昧ではない]; sch**ee**n (*dt.* schön);	個人の裁量で母音字を 2 字に増やす: e.g. h**o(o)**ch; Spr**o(o)**ch; **O(o)**schtre; D**àà**; B**üü**r sch**ee**n; n**oo**ch

[58] 音声・音韻表記など本稿筆者により一部改変されている; 選択肢 A,B は各項目単位で参照のこと。

[59] アルザス語における男性与格の不定冠詞 me [mə]は、性と格を表す m と、不定性を表す e という 2 つの形態素からなっている(女性与格の場合は(e)r=e)。この不定冠詞が前置詞とともに用いられない場合(e.g. 動詞がとる与格目的語の冠詞)、方向などの意味を持たない自由形態素 *els.* ìn [en] が先行する(i.e. ìme; e.g. *els.* Ich hàb noch schnell **ín(e)re** ältere Màdàm gholfe. *dt.* Ich habe noch schnell **einer** älteren Dame geholfen.; cf. Jenny & Richert 1984:44-45)。少なくとも m は接語であると考えらえる。

	n**oo**ch (*dt.* nah)	
/g̊ʃd̥/	<gscht>: e.g. naa**gscht**ens (*dt.* nächstens)	<chscht>: e.g. naa**chscht**ens
二重母音の後の<h>添加	e.g. Frèijohr (*dt.* Frü**h**jahr) [添加しない]	e.g. Frèi**h**johr [ドイツ語に基づき添加]
[ai]	<ei>: e.g. H**ei**met (*dt.* H**ei**mat) <ai>: e.g. M**ai** [ドイツ語に基づき使い分け]	すべて<ai>: e.g. H**ai**met; M**ai**
[æi]	<ëi>(*dt.*<ei, eu>): e.g. D**ëi**fel (*dt.* T**eu**fel); H**ëi**met (*dt.* H**ei**mat); <äi>(それ以外): e.g. Tr**äi**m (*dt.* Traum) [ドイツ語に基づき使い分け]	すべて<äi>: e.g. D**äi**fel; H**äi**met; Tr**äi**m
([œi],)[œy][60]	*dt.*<eu>の一部語を除き<äu>: e.g. Fr**äu** (*dt.* Fr**au**); B**eu**ta (*dt.* B**eu**te) [ドイツ語に基づき使い分け]	すべて<äu>: e.g. Fr**äu**; B**äu**ta
[oi]	<aui>(=*dt.* <au>): e.g. Fr**aui** (*dt.* Frau); Tr**aui**m (*dt.* Traum); <oi>(それ以外): e.g. R**oi**(h)m (*dt.* Rahm)	すべて<oi>: e.g. Fr**oi**; Tr**oi**m; R**oi**(h)m
[ɒi]	<àui>(=*dt.* <au>): e.g. Fr**àui** (*dt.* Frau); Tr**àui**m (*dt.* Traum); <ài>(それ以外): e.g. R**ài**(h)m (*dt.* Rahm)	すべて<ài>; e.g. Fr**ài**; Tr**ài**m; R**ài**(h)m
[u],[ʊ]の区別	<u> [u]: e.g. ànr**u**fe (*dt.* anrufen) <ù> [ʊ]:	<u>: e.g. ànr**u**fe, k**u**rz [区別しない][61]

[60] [œy]は Alsace bousse に隣接する Berling 変種(モーゼル県)などで今日も残存するものの、アルザス語全体としては、80 年代以降かなり珍しくなっているという(Beiner Nathanaël 氏との個人的な会話より, 2023 年 9 月 12 日)。それにもかかわらず、この一覧表において、なぜ同じ書記素を用いる[œj]ではなく[œy]が当該項目を代表しているのかは不明である。

[61] Orthal は母音の違いを表すことを目的として、アクサン記号やウムラウトなどを補助記号としてふんだ

	e.g. k**ù**rz (*dt.* kurz) [区別する]	

そしてこの 2023 年は、アルザス語にとって綴字法以外でも大きな変化の年(*Zeitenwende*[62])となった。具体的にはフランスの国民教育省が史上初めて、ドイツ語・アルザス語・フランス語の 3 言語による没入型クラス(classes immersives)「トミー・ウンゲラー(Tomi Ungerer[63])コース」をアルザスの 4 保育園(Brumath, Altkirch, Séléstat, Colmar)で開講した[64]のである。このコースは、進行の 75%がドイツ語とアルザス語、残りの 25%がフランス語によっておこなわれるといい、このことを報じた記事には、ホワイトボードに„de erschte Schueldàà ![65]"(「新学期初日！」)とアルザス語で綴る教員(Pascale Riehl 氏)の、歴史的ともいえる写真が添えられていた。しかし同時に、アルザスにおけるドイツ語教育が大きく衰退していること、そして次世代を担うアルザス語話者は(アルザスの)7 歳から 18 歳までの若者のうち 7%にとどまっていることなど、このトミー・ウンゲラーコースが最初に直面することになるであろう現状についても報じられている。また、アルザス語とドイツ語の教員育成を目的として、ストラスブールやミュルーズにおける大学奨学金の提供も 4 月時点で検討されており、当該コースの持続的な開講に向けた取り組みも進められているようである[66]。

国民教育省はこの 3 言語による没入型コースの評価を来年度末におこなうとしており、今後の展開にも注視する必要がある。特に本稿のテーマに即せば、このコースにおけるアルザス語教育がはたして ORTHAL など特定の綴字法を採用したうえでおこなわれるのかという点は大きな関心事である。というのは、これまでアルザス語に対して提唱されたいずれの綴字法も、その普及を実現するための政治的効力を有していなかった(Beiner 2022b:144) からである。

んに用いるが、これは普段使いの綴字としては高コストであるかもしれない。Beiner (2022a)は、自らがアルザス語でメモ書きする際は使用する記号や区別する母音を減らす(<à, ä, ö, ü, ï>は用いるが<ù, ë, è, é, i>は用いない、[u]と[ʊ]を区別しないなど)といったように、用途に応じて綴字の細部が変化することを紹介している。これは日本語話者でいうところの、子ども向けに平仮名を多用したり、「問」などの漢字を簡略化して書いたりする場面が近似しているものと思われる。

62 「時代の変わり目」を意味するこのドイツ語は、André Weckmann が最期に世へ送り出した短編集のタイトルでもある。

63 アルザス出身の児童文学作家(1931-2019)。日本でも知られている作品として『すてきな三にんぐみ』(*dt. Die Drei Räuber*)がある。

64 "Pour la première fois, l'éducation nationale ouvre des classes immersives alsacien-allemand-français" (2023 年 9 月 3 日) < https://www.francebleu.fr/infos/education/pour-la-premiere-fois-l-education-nationale-ouvre-des-classes-immersives-alsacien-allemand-francais-6316854 >[最終閲覧日: 2023 年 9 月 10 日]

65 ストラスブール圏変種を綴ったものと考えられるが、ORTHAL では eerschte のように長母音の明示が必要になるケースである。

66 "Première historique : le rectorat de Strasbourg ouvre quatre classes immersives allemand-alsacien-français"(2023 年 4 月 3 日)< https://www.francebleu.fr/infos/education/premiere-historique-le-rectorat-de-strasbourg-ouvre-quatre-classes-immersives-allemand-alsacien-francais-9807167 > [最終閲覧日:2023 年 9 月 10 日]

4.日本語で伝えるアルザス語　—おわりに—

アルザスの言語文化について、ドイツ語からフランス語とアルザス語を、あるいはフランス語からドイツ語とアルザス語を見渡したとき、私たちが言語を超えて統一されたターミノロジーを手にしているわけではないということ、そして双方が大きな負担なく参照できる共通資料が思いのほか多くないことに気づきはじめる。たとえ *dt.* Dialekt と *fr.* dialecte、*dt.* Nation と *fr.* nation[67]が形態的に同質であっても、異なる言語圏で異なる遍歴を経た 2 つの語が、全く同じ対象を指示しているとは考え難く、同様の問題は、「*fr.* patois とは何なのか、*fr.* dialecte と何が違うのか[68]」といったように、同一(とされる)言語の中でもみとめられる。それでありながら、複数の類義語の間にある違いを精細に取り出すことは容易ではなく、研究をおこなう際には都度個人レベルで便宜上の定義を明示するしかないのが現実である。

その意味において、アルザス語に関連する文献を邦訳したり、フランス語やドイツ語で書かれた文献とそこに登場する用語について日本語で言及したりすることは、紹介という目的があったとしても、確かに適当ではないかもしれない。それでも、ふとしたきっかけで「アルザス語」の存在を知り、本稿筆者のように興味を持った日本語母語話者が、言語的負担が比較的少ないまま触れられる文献[69]や、そのアルザス語をさらに知るために最初に学んだ言語がフランス語であったかドイツ語であったかによらず[70]、一旦共通して参照できる資料が充実することを考えれば、日本語による発信も選択肢にあってよいはずである。加えて、日本におけるゲルマン語研究者 - ロマンス語研究者間の一接続地点としての役割、日本国内の少数言語や地域変種に関する取り組みに際して参照することができる海外のケーススタディとしての機能など、この試みにはさらに多くの意義を見出すことができると考えられる。

---

[67] cf. 塩川(2008 :14-17)

[68] cf. 宮腰 (2022)

[69] 直近では杉浦 & 宮腰(2022)が最適である。

[70] ここはまさに「アルザス言語文化研究会」＜https://elsass.web.fc2.com/＞[最終閲覧日: 2023 年 9 月 11 日]の運営者 3 名((主に)フランス語からのアプローチ 2 名, (主に)ドイツ語から 1 名)の間で大きく異なる点の 1 つである。

〈アルザス語そのものに関する読書案内〉 −2023 年時点で入手が（流通・価格的に）困難でないもの−

【フランス語】

・Matzen, Raymond & Daul, Léon (2010): *Apprenons l'Alsacien ! Wie Geht's Le dialecte à la portée de tous*, La Nuée Bleue. (ISBN: 978-2716507660)

ストラスブール変種をベースにしたアルザス語学習書。用いている綴字(ORTHAL ではない)と音素の対応表と文法項目がはじめにまとめられており、アルザス語によるダイアログ(仏語訳あり)が豊富である。巻末にア仏・仏ア語彙索引あり。

・Troxler, Sylvie (2021) *J'apprends l'alsacien avec Tommy et Louise*, Editions MK67. (ISBN: 978-2370185204)

南北のアルザス語 2 変種が併記された、子ども/初学者向けのアルザス語教科書。CD 音声付き。

【ドイツ語】

・Weiss, Raoul (2001/2020): *Elsässisch: die Sprache der Alemannen,* Kauderwelsch. (ISBN: 978-3894165147 / 978-3831765584)

コルマール変種をベースにしたアルザス語概説書。本稿でも登場した後舌母音[ɒ]が<à>ではなく<å>、[æ]はそのまま<æ>で表されるなど、用いられている綴字はまた少し独特であるが、「アルザス語」の概要から düen (*dt.* tun)の用法、コードスイッチングの話まで網羅しており、アルザスにおける言語使用の解像度が上がる一冊である。

【アルザス語】

・Adrien Fernique (trans.) (2017): *De klaan Prinz*, Edition Tintenfaß. (ISBN: 978-3946190523)

サン＝テグジュペリ『星の王子さま』のストラスブール変種訳。仏語原文あり。

なお本稿に登場した GRIMAL や ORTHAL2016/ 2023 は、インターネットで閲覧することができる(参考文献一覧にリンク掲載)。

参考文献

市村卓彦 (2002):『アルザス文化史』, 人文書院.

作本大祐 (2022): 「アルザス・ドイツ語の二形態素間ないし二語間において母音が連続する場合に認められる有声唇歯摩擦音挿入現象の文法的記述への試み」, 学士論文（未公刊; 成城大学）.

塩川伸明 (2008):『民族とネイション–ナショナリズムという難問』, 岩波書店.

柴崎隆 (2012) :「〔南部〕アルザス・ドイツ語の文法記述へのアプローチ : ミュルーズ・アルザス語方言に基づいて」『金城学院大学論集 人文科学編』8(2), pp.12-55.

—— (2015) :「アルザス語の助動詞 tüen/düen (dt. tun)の用法と機能」『ドイツ文学』150, pp.28-47.

杉浦黎 & 宮腰駿 (2022):「アルザス語 ([特集]多彩なるフランスの地域言語)」『ふらんす』97(3), pp. 15-17.

高田博行 & 新田春夫 (2013):『講座ドイツ言語学 第 2 巻 ドイツ語の歴史論』, ひつじ書房.

フィリップス, ウージェーヌ (宇京頼三 訳) (2010) :『アルザスの言語戦争』, 白水社.

宮腰駿 (2022):「アルザスにおける言語名称に関する予備的考察」, 第 2 回アルザス言語文化研究会 (2022 年 3 月 20 日, オンライン開催).

Académie pour une Graphie Alsacienne Transfrontalière (A.G.A.T.e)(2016): *Le système ORTHAL 2016 – Orthographe alsacienne : Quelques règles de base pour faciliter l'écriture et la lecture de l'alsacien dans toutes ses variantes*, < https://www.agate-orthal.fr/Orthal-2016 >.

—— (2023): *Orthal 2023*, < https://www.agate-orthal.fr/Orthal-2023 > [最終閲覧日: 2023 年 7 月 17 日].

Beiner, Nathanaël (2022a) :「アルザス語の綴字法に関する提議」, 第 3 回アルザス言語文化研究会 (2022 年 8 月 21 日, オンライン開催) [Beiner(2022b)をベースとした口頭発表].

—— (2022b) : *Quelle(s) norme(s) pour l'écriture de l'alsacien en 2022 ?* , mémoire de maîtrise (未公刊; Université de Strasbourg)[未公刊につき、著者である Beiner 氏より直接許諾を得たうえで本稿での引用をおこなっている; 2023 年 9 月 8 日].

Beyer, Ernest & Matzen, Raymond (1969) : *Atlas linguistique et ethnographique de l'Alsace*, Editions du Centre national de la recherche scientifique.

De Saint-Exupéry, Antoine (1995) : *D'r klein Prinz* (Zipfel, Antoine, Trans.), La Nuée Bleue.(Original work published 1943)

Duden, Konrad (1908): *Orthographisches Wörterbuch der Deutschen Sprache*, 8. Auflage, Bibliographisches Institut, Leipzig und Wien.

Erhart, Pascale (2020): „Von der ‚Mundart' zur ‚Fingerart' Was bedeutet es heute, Elsässisch zu sprechen bzw. zu schreiben?", *Sprachreport,* 36, pp.6-13.

Grimm, Patrick (n.d.): *Le système GRIMAL – Graphie intuitive et modulable de l'alsacien*, < http://alsacien.dialecte.free.fr/> [最終閲覧日: 2023 年 9 月 13 日].

Jenny, Alphonse & Richert, Doris (1984): *Précis pratique de grammaire alsacienne (en référence principalement au parler de Strasbourg)*, Istra, Strasbourg.

Katz, Nathan (1930/1987): *Sundgäu*, Arfuyen, Paris.

König, Werner (2019): *dtv-Atlas Deutsche Sprache*, 19. überarbeitete und korrigierte Auflage, dtv Verlagsgesellschaft mbH&Co. KG, München.

Matzen, Raymond & Daul, Léon (2010): *Apprenons l'Alsacien ! Wie Geht's Le dialecte à la portée de tous*, La Nuée Bleue.

Martin, Ernst & Lienhart, Hans (1899-1907): *Wörterbuch der elsässischen Mundarten*, Trübner, Straßburg.[オンライン版あり(Wörterbuchnetz) < https://woerterbuchnetz.de/ >, Trier Center for Digital Humanities; 最終閲覧日: 2023 年 9 月 14 日]

Neukirch, François-Xavier (1904): *s'Pfiffel vum e Meiselocker*, Verlag von Schlesier & Schweikhardt, Straßburg.

Riehl, Claudia Maria & Beyer, Rahel (2021): „Deutsch als Minderheitensprache", *Lublin Studies in Modern Languages and Literature*, 45(1), pp.7-20.

Stoskopf, Gustav (1905): *Luschtigs üsm Elsass un G'spass un Ernscht*, Verlag von Schlesier & Schweikhardt, Straßburg.

Urban, Michel (1975): *Écrivez l'alsacien: traité d'orthographe unifiée du dialecte alsacien*, Développement& Communauté, Strasbourg.

Weckmann, André (1975): *schang d sunn schint schun lang (Petite Anthologie de la poesie alsacienne* **7**), Association Jean-Baptiste Weckerlin, Strasbourg.

——(1989): *elsassischi grammatik oder ein Versuch, die Sprache auszuloten*, Pfaffenweiler Presse.

Zeidler, Edgar (2007): *Andzitt Endzeit Fin d'une époque*, Jérôme Do Benzinger.

Zeidler, Edgar & Crévenat-Werner, Danielle (2008) : *Orthographe alsacienne : Bien écrire l'alsacien de Wissembourg à Ferrette*, Jérôme Do Benzinger.

—— (n.d.): *Guide pour écrire et lire l'alsacien : Quelque régles de base pour faciliter l'écriture et la lecture de l'alsacien dans toutes ses variantes, d'après la méthode ORTHAL*
< https://www.olcalsace.org/sites/default/files/publications/livret_orthal_2021.pdf > [最終閲覧日: 2023 年 9 月 12 日;『発話言語学研究』本号にて宮腰・杉浦訳が掲載されている。].

（さくもと　だいすけ / 京都大学大学院）